Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-05-15

トッコ著「聖トーマス・アクィナス傳」の源泉

五百籏頭, 眞治郎

(Citation)
国民経済雑誌,60(3):311-325

(Issue Date)
1936-03

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/00054985

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/00054985

論說

トッコ著「聖トーマス・アクィナス傳」の源泉

五百籏頭眞治郎

はしがき――聖トーマス・アクィナスが、近時種々なる方面より關心の的とせらるるに到つたことは、注目すべき顯著なる現象なりと云はねばならぬ。彼は唯に哲學神學の方面より研究せらるるに止まらず、また社會學、經濟學、法律學、其他多くの學的立場より考察せられてゐる。

筆者もまた聖トーマスの學問を考究せんと志すものであるが、既に繰返し述べたる如く、彼の「學問的性格」を理解するためには、まづ彼の生活、特に彼の聖者的生活を充分に認識することが前提條件をなすものと考へる。この意味に於て、筆者はさきにトーマスの傳記史料に關し些か批判を試みた（拙稿「碩學中の聖者トーマス・アクィナス」神戸商大創立三十周年記念論文集、同「トッコ著『聖トーマス・アクィナス傳』批判」國民經濟雜誌第五九卷第六號）。本篇に於ては、聖トーマスの生活を知る上に最も重要なる總和的傳記史料たるトッコの「聖トーマス・アクィナス傳」に關して、其の源泉を明にして見たいと思ふ。

聖トーマス・アクィナスの傳記を書くに當り、トッコの利用した源泉的資料は、之を（一）書き物の形態を備へてゐない著者の目擊並に他人の證言と（二）既に書き物となつてゐた他人の著述の二つ

に分つことが出來る。

一

一　トッコ著「トーマス傳」の源泉は、一部分彼の自ら目擊したところに發してゐる。彼はナポリに於て行はれたトーマスの諡聖調査に際し、次の如き證言を提出した。

「私は、トーマス修士が、哲學に關する彼の最後の勞作と思はれるアリストテレスの De generatione et corruptione の註釋（註一）に筆を染めて居られるのを見た。また彼の說敎と講義にも列したが、その說敎には多數の民衆が集まり來つて熱心に耳を傾けてゐた。彼は柔和謙遜で俗事を輕んじた。また淸淨潔白で、一般に言はれてゐるところによれば、彼は生れたままの童貞を守り通したとのことである」（註二）。

トッコが諡聖調査に於て、トーマスに就き直接自ら目擊したこととして立證してゐるところは右に盡きる。ペルスターの言ふところによつて見ても、トッコの自ら目擊したことは大體これ以上に出ないものの如くである（註三）。尤もトッコはトーマスの晩年、卽ち一二七二年から七四年まで、ナポリに於てトーマスと同じ修道院內に起居した。從つて彼は直接の經驗よりトーマスの生活に關し、更に多くの立證をなし得るが如く考へられるかも知れない。然し當時トッコは恐らくは未だ三十餘才の無官の修士であつたらうと思はれる。これに反し、トーマスは歐洲に冠たる大碩學として、ひたすら研

究と祈りに沒頭してゐた。從つて互に親しく接する機會は、トッコがトーマスの秘書役として彼の學問的勞作の手傳でもしない限り、少なかつたに相違ない。而も彼にかゝる役目が課せられて居たと思はしめる如き痕跡はいづこにも見出すことは出來ない。かかる點より見ても、トッコの「トーマス傳」の源泉的資料は殆んど全部他人の證言と報告に依存したものと言はねばならぬ。以下トッコに此等の證言報告を提供した人々を順次明にすることとしよう。

（註一） 玆にトッコの言及してゐる De generatione et corruptione の註釋（ヴィヴェス版トーマス全集第二三卷二六七—三八六）は、レオ版のトーマス全集が出版せられる時まで（一八八六年）全部トーマスによつて完結されたものの如く信ずる人が多かつた。然し古人によつて揭げられてゐるトーマスの著書目錄には、未完結なる旨を明にしてゐるものが少くない。例へばトロメオ・ダ・ルッカの目錄（Mandonnet, Des écrits authentiques de S. Thomas, 1910 p. 61）には「未完結」と附記されてゐる。また諡聖調査のときに教皇に呈出されたオフィッシァルな目錄（op. cit. p. 31）及びジョヴァンニ・ダ・コロンナの目錄（op. cit. p. 98）等には、同書第一卷（super primum librum）の註釋となつてゐる。のみならずオックスフォードのメルトン・カーレッヂにある手寫本（cod. 374）によれば、同書の第一卷第十七講（lib. I. lect. 17）の終りにある et finaliter corrumpetur vinum, et fiet totaliter aqua と言ふ desinit（結びの句）の次に、左の如き注意書が記されてゐる。「ここでトーマス・アクィナス修士の叙述は終り、ストーナのトーマス修士の叙述が始まる（Hic terminatur expositio fratris Thomae de Aquino et incipit expositio fratris Thomae de Suthona）」と。故に私はグラープマンと共に Sicut tradit Philosophus in tertio De Anima, scientiae secantur quemadmodum et res. と言ふ incipit（書き出しの句）（Ed. Vivès Tomus XXXIII p. 266）より右の desinit（結びの句）（op. cit. p. 314）までがトーマスの筆になつたものと信ずる。また第一卷第十八講より第二十五講まで、及び第二卷全部はストーナのトーマスによつて書かれたもののように考へられる。尤も此點に就ては Trevet（一三二八年死亡）のトーマス著書

目錄（Mandonnet, op. cit. p. 49）に、トーマスが恰も全二卷の註釋をした如く思はしめる句 De generatione et corruptione, libros duos がある。またマンドヌネの如き現今有數の權威者も、今は知らぬが少なくも一九二一年四月までに關する限り、トーマスが全二卷の註釋をしたものと信じてゐた。尙これらの問題に就ては上揭引用書の外に次の著書を參照せらるべし。

Grabmann, Die Werke des hl. Thomas von Aquin, 1931, S. 264 f.

Mandonnet, Bibliographie thomiste, 1921, p. XX.

（註二）ラテンの原文ではトッコの證言は三人稱で書かれてゐるが、茲では便宜上一人稱に改めて飜譯した。（Processus, n. 58）

（註三）Pelster, Die älteren Biographien des hl. Thomas von Aquino, Zeitschrift für katholische Theologie, 1930, S. 383.

二

トッコは彼自らも言へる如く、トーマスの血族より源泉的資料を得た。トッコは、一三一七年の十一月頃から、アブルッチ（Abruzzi）地方に住むトーマスの末の妹テオドーラ（ヨーロッパに於て屢々其例を見る如くトーマスの母も同じくテオドーラ Teodora と言ふ名の人であつた）の子、マルシコの伯爵トーマス・デ・サン・セヴェリーノの家を訪れたのであつた。そしてトッコは先づ伯爵よりトーマスに關する證言を得た。のみならずそこでトーマス・デ・サン・セヴェリーノのいとこであり、また聖トーマスのもう一人の女きようだいのマリーア（Maria）の息女たるカタリーナ（フランチェスコ・ダ・モーラの夫人にして當時既に老齢に達して居た）にも遇ふことが出來た。斯くしてトッコは彼女からも種々聖トーマスに關する證言を聽取した。聖トーマスには兄弟六人と姉妹五人あつたが、右に引用した人々とトーマスとの關係を表示すれば次の如くになる（註）。

聖トーマスの
- 父　ランドルフォ
- 母　テオドーラ
  - 聖トーマス
  - マリーア（グリエルモ・サン・セヴェリーノ夫人）—カタリーナ
  - テオドーラ（ルッジェーロ・サン・セヴェリーノ夫人）—トーマス・デ・サン・セェヴリーノ

（兄 ↔ 弟）

（註）Processus n. 60, 62, etc.; Tocco, Vita S. Thomae (Prümmer 版) c. XXXVII; Pègue et Maquart, Saint Thomas, Sa vie par Tocco. c. XXXVIII; Scandone, La vita, la famiglia e la patria di S. Tommaso (S. Tommaso d' Aquino, Miscellanea storico-artistica, 1924)

三　聖トーマスと同じドミニコ會員で、各地の同會修道院に於てトーマスを知り、または彼と親しく交り、或はトーマスの傳記史料を集めなどした人々の證言は、トッコの著述の有力なる源泉的資料を構成した。これはナポリの諡聖調査に於ける彼の證言に徴しても明である（註一）。そのうち最も重要なのは、レヂナルド・ダ・ピペルノ（Reginaldo da Piperno）及びトロメオ・ダ・ルッカ（Tolomeo da Lucca）の證言である。レヂナルドは後に述べる如く、トーマスに最も近く仕へた重要人物である。またトロメオと聖トーマスとの重要なる關係、及びトロメオに聖トーマスの傳記を含む著述あること等に就ては既に別の機會に於て述べた（拙稿「碩學中の聖者トーマス・アクィナス」神戸商大創立三十周年記念論文集一七〇頁以下參照）。尚ここに一言次の事實に注意しておきたい。即ちそれはナポリに於ける諡聖調書中にあるトッコの證言を讀めば、ドミニコ會修士ペトルス・デ・セシア（Petrus de Setia）もトッコに重要な

る證言を與へた人となつてゐると云ふことである（註二）。然しこの事實はトッコが其後自著「トーマス傳」に於て述べてゐる如く、ペトルスと上述のレヂナルドを混同したものと思はれる（註三）。

（註一）Processus, n. 58—65.

（註二）Processus, n. 58.

（註三）ナポリの諡聖調査當時に於けるトッコの記憶に從へば、聖トーマスの葬儀に際し、弔ひの說教をしてトーマスの終生童貞（肉體的精神的童貞を含む）を證言した人は、英國ドミニコ會の Procurator ペトルス修士（Fr. Petrus de Setia）のように思はれてゐた（註二參照）。然るに、トッコのトーマス傳には次の如く記されてゐる。即ち、彼が諡聖促進のためアヴィニオンへ再度の船旅をしたとき、トーマスが夢に現はれたので、「私はあなたの全生涯にわたる傳記をお書き致しました。そのうちの或る感歎すべき一事につき、私はそれが果して事實と全く一致してゐるか否かを知りたいと存じます。あなたは御永眠の時まで、ペトルス修士が說教せられた如く、生れたままの童貞を守り通されたので御座いませうか」と、トッコはかく尋ねた。そのときトーマスはその讃辭に少し羞かむが如き樣子をしたのち、その通りであるが、說教をしたのはペトルス修士でなく、私の伴侶レヂナルド修士であつた」と答えた（Tocco, Vita [Prümmer] c. XXVIII ; Pègue et Maquart, op. cit. c. XXIX）。

四　トッコはトーマス臨終の場所であつたフォッサノーヴァに於けるチステルチェンセ會修道院の多數の修士たちよりトーマスに關する資料を得た。彼は一三一九年四月より約四ケ月間にわたり同修道院に滯在して種々調査するところがあつた（Processus, n. 63, 64 ; Janssens op. cit. p. 466）。

五　トッコは、聖職に身をおかぬ多數の普通人からも種々證言を聞いた。就中最も重要なのはバルトロメオ・ダ・カプアの證言である。バルトロメオがトッコにとり重要な證言者であつたことは、諡

聖調書に於けるトッコ及びバルトロメオの證言、並に後者の人物・職業・業蹟等を知れば容易に想定し得ることと思ふ。トッコの證言中には大要次の如き意味の句を讀むことが出來る、「トーマスを知り、彼と生活を共にした多數の人々、殊にレヂナルド修士及びバルトロメオ・ダ・カプアから、私は同樣のことを聞いた」と（傍點筆者）（……et audivit etiam dici, et referri praedicta a pluribus Religiosis et secularibus antiquis, qui eum cognoverunt, et conversati fuerunt eum eo, et specialiter a supradicto Fr. Reginalds, et a Domino Bartholomeo de Capua……Processus n. 59）。また他方に於て、バルトロメオがジョヴァンニ・デル・ジューディチェからトーマスに關する重要なる事實を聞いたとき、彼は「それを出來得る限り速にグリエルモ・ダ・トッコ及びそのほか多數のドミニコ會修士に知らせた」と語つて居る（……et dictus festis haec revelavit et dixit, quam cito potuit, Fr. Guilhelmo de Tocco, et pluribus aliis Praedicatoribus……Processus, n. 79）。かくの如くバルトロメオが特にトッコをとりたてて名指してゐる事實は、先に引用したトッコの證言と相俟つて、バルトロメオがトーマスに關し、屢々トッコと話し合つたことを想像せしめる。バルトロメオは一二四八年カプアに生れた人で、トーマスが晩年ナポリで講義した頃は同地で學生生活をおくつてゐた。彼は聖者の學說に深き感銘を得て其熱心なる信奉者となつた。一二七八年には國王カルロ一世より民法の教授たる資格を附與せられ、後には protonotario や logoteta（註一）の重職に就任した。彼はカルロ一世及びカルロ二世をして聖トーマ

スの屬するドミニコ會に厚意を持たしめ、また之を援助せしめた。彼は、トーマスを知りまたは彼と親交のあつた多數のドミニコ會修道士と親しき間柄にあつたので、此等の人々よりトーマスに關する種々の報告を得た。就中最も重要なのは次の三者の證言である（註二）。

(a) レデナルド・ダ・ピペルノ――トーマスの伴侶、

(b) ジョヴァンニ・ダ・サン・ジュリアーノ――トーマスのドミニコ會入會を許可した靈父、

(c) ジョヴァンニ・ダ・カイアッツォ――パリ及びナポリでトーマスと共同生活をなし、彼と親密なる交りを續けた有力なるドミニコ會修道士、

多數の重要なるドミニコ會修道士よりトーマスの話を聞いてゐたバルトロメオ・ダ・カプアは、平素から唯にトーマスの著書目錄を作つてゐたのみならず、またトーマスの傳記史料をも集めてゐたもののやうに思はれる。それなればこそ、彼の作つた著書目錄が、諡聖調査に於けるオフィッシァルな著書目錄に採用されるほど立派なものとなつたのでもあり、また諡聖調査に際し、早速トーマスの總和的傳記に近いものを證言として提出することが出來たのであらう。バルトロメオ・ダ・カプアがトッコに對し、諡聖調査に提出した證言の全部を語り傳へたか否かは疑問である。筆者には勿論全部を傳へたものとは信じられない（註三）。然しバルトロメオが、トーマスに關する多くの事實をトッコに告げたことは、既に述べた如く、想像するに難くない。

（註一）logoteta の字義――フィッカーによれば一〇二二年頃は canceriere の官職を指した。またマイヤーに從へば、十二世紀の初頭頃は「直接王に報告し、王の決定事項を官房に取次ぐ官職」を指した。更に一一三二年頃にはロゴテータは canceriere の下に屬する官職を意味したようである。バルトロメオの時代に如何なる意味に使はれてゐたかは遺憾ながら精確なる根據を持たぬ。然し大體上記の如き意味に使はれたものと思はれる。バルトロメオに關する記事には「非常に高いロゴテータの職」と云ふ字句が繰返されてゐる。尙この際、右の字義釋明につき種々便宜と助言を與へられた宮下孝吉教授に謝意を表しておきたいと思ふ。（Vgl. Ficker, Forschungen zur Reichs- und Rechtsgeschichte Italiens, 1. Band, S. 325 ; Mayer, Italienische Verfassungsgeschichte von der Gothenzeit bis zur Zunftherrschaft, 2. Band, S. 382 f. ; Mandonnet, Écrits authentiques, p. 29）。

（註二）Taurisano, Discepoli e biografi di S. Tommaso. (S. Tommaso d'Aquino, Miscellanea storico-artistica, pp. 155—158) ; Processus n. 76—84 ; Pelster, Die älteren Biographien, S. 389 f.

（註三）バルトロメオ・ダ・カプアは謚聖調査に提出した證言の全部をトッコに傳へたとは思はれない。今その理由の一つをここに略述しよう。

聖トーマスは、成年期に達した頃、一切の世俗的榮華をはなれ專ら祈りと研究の生活を營むため、ドミニコ會にはいることを堅く心に決してゐた。然し彼の父は、トーマスを將來もつと榮職に就かしめ、且世俗的權勢をも振はしめたいと冀つてゐた。そこで彼はトーマスの意志を覆すため、トーマスを年餘にわたり自分の城に監禁したのであつた。然しトーマスの意志は牢として動かなかつた。――ここまではすべての傳說が一致してゐる。然しトーマスが終に父の許諾を得て素志を貫徹するに到つたか、それともみづから父の監禁を脫出したかの點に就ては傳說は分れる。

バルトオ・ダ・カプアに從へば、トーマスの父は母方の切願にほだされてトーマスに自由を與へた。そしてこの事實はジョヴァンニ・ダ・サン・ジュリアーノ（トーマスにドミニコ會入會を許可した靈父で、時々監禁中のトーマスを訪れた修道士）によつて、ナポリのドミニコ會修道院に傳へられた。これは同修道院の內外に於て等しく認められてゐるところである（Processus, n. 76）。

次にトッコによれば、トーマスは城壁に綱をおろして脱走してゐる。此點トッコはトロメオ・ダ・ルッカ説に依存し（Vita di S. Tommaso scritta da fra Tolomeo da Lucca, Taurisano, op. cit. p. 183）、トーマス・カンティプラターヌスに近づいてゐるやうである（Pelster, S. J. op. cit. S. 389）。

思ふにトーマス・カンティプラターヌス、及びトロメオ・ダ・ルッカの系統に屬するトッコの説は、恐らく事實を多少ドラマティックに傳へた世評に基礎をおいてゐるもののようである。之に反し、バルトロメオ・ダ・カプア説は傳説を初めて產んだ源泉的な場所と人に其根據を求めてゐる。私はバルトロメオ・ダ・カプアがナポリのドミニコ會修道者たちと親密なる關係にあつたことをも併せ考へ、彼の説により多くの信頼を持つ。トッコがバルトロメオ・ダ・カプアの説を採らず、巷説を根據として採り入れたのは、バルトロメオ・ダ・カプアより上述の話を聞かなかつたためであると思ふ。

二

一　トーマスに關する諡聖調書、殊にナポリに於ける諡聖調書が、非常に有力なるトーマス傳記史料なることは別の機會に於て述べておいた（前掲記念論文集一七四頁以下參照。さて茲に問題となるのは、トッコがこの諡聖調書を利用したかどうかと言ふ點である。諡聖調書の公開は、證言者又は其他の現存者の名譽に關することもあり得るので一般に許されてゐない。のみならずトッコは諡聖調査を教皇に申請してその裁可を得た人ではあるが、教皇によつて任命された諡聖調査委員ではなかつた。故に彼は諡聖調査に於て、自ら證言を提出する地位には立つたが、公式に證言を受理する地位には置かれてゐなかつたのである。從つてこの點から見ても彼は諡聖調査を讀まなかつたものと思ふ。今假に彼の

ため特にその閲覧が許されたとしても、次の事實はこの假定を覆すものと言はねばならぬ。

(a) ジョヴァンニ・コッパ・ダ・ナポリ（Giovanni Coppa da Napoli）は、その實兄ボノフィリオ・ダ・ナポリ修士（Fr. Bonofiglio da Napoli）と共に、トーマスの頭上に強い光の星が輝いたことを目擊した。彼がこの事實を諡聖調査に於て供述したことは同調書に明である(註一)。然るにトッコによればボノフィリオが座をはずして居た間に、コッパが之を見たことになつてゐる(註二)。若しトッコが諡聖調書を讀んでゐたならば、必ずや證據力の最も強い目擊者の證言を採用したであらう。從つて右の如き謬說には陷らなかつたことと思はれる。

（註一）Pègue et Maquart, op. cit. p. 304—306.; Mandonnet, La canonisation de Jaint Thomas d' Aquin, Mélanges thomistes, 192?, p. 31.

（註二）Tocco, Vita (ed. Prümmer) c. LVI.

(b) ナポリの諡聖調査の證言提出者であるフォッサノーヴァの修道士ピエトロ（Pietro del Castello di Monte San Giovanni）は、自ら目擊したところに基き大約次の如き事實を述べてゐる。

「聖トーマスが最後の病氣に罹つて食慾を失つてゐたとき、彼の伴侶レヂナルドは衰弱を防ぐためもつと食事をとることを勸めた。然し病人は『生の鰊が得られるでせうか』と尋ねるのであつた。『それはアルプスを越えて、イギリスかフランスにでも行かない限り得られないでせう』。トーマスと

レヂナルドとの間にかかる問答が始まつてから、しばし此話題は續いた。その折、ボルドナリウスと言ふ平素この此地方で鰯を商つてゐる男が來た。レヂナルドはその籠をあけさせたところ、生の鰊が一ぱい滿ちてゐた。……それを買ひ求めて私（ピエトロ修士を指す—筆者）もトーマスも、またそこに居合せた多數の人々も皆これを食べた」（註一）。

トッコは右の證言を知らざるものの如く、この證據力のより强い目擊者の證言を採らず、證據力のより薄弱な巷說を根據としてとり入れてゐる。卽ち彼によれば、鰊のことに就てトーマスと話を交したのも、またかの魚商人を呼びとめて魚籠をあけさせたのもレヂナルド・ダ・ピペルノではなく、ピペルノの醫者と言ふことになつてゐる。またトッコに從へばトーマスは鰊に手をつけて居らず、ダヴィドに倣ひこれを犧牲として神に捧げたことになつてゐる（註二）。これ等の事實はトッコが諡聖調書を讀まなかつたものとしなければ理解し難い。

（註一）Processus, n. 50.

（註二）Processus, n. 9; Tocco, Vita (Prümmer) C. LVI.

トッコが諡聖調書を利用しなかつた事實の論證は右の程度にとどめておく。然し茲に注意しておきたいことは、トッコが右の調書に記された證人中の幾人かと個人的に面接して證言の反覆を依賴したことである。卽ちトッコは上記證人の多くを個人的に知つてゐたから、ナポリの諡聖調査の好機を利

用して彼等の或者より個人的に報道を得、以て當時執筆中のトーマス傳の資料を豐富にする事が出來たのである。

二　トロメオ・ダ・ルッカが、其著 Breves Annales 1303—1306 及び Historia Ecclesiastica 1312—1317 に於て、トーマスの傳記を取扱つたことに關しては既に述べた（前掲記念論文集一六九—一七四頁）。トロメオの舊友トッコがこの Historia の存在を知らなかつた筈はないやうに思はれる。それは「トーマス修士の教へ子で、彼の聖者性の敍述に多くの紙幅を割いた……トロメオ修士」云々（……a Fr. Tholomeo ……qui fuit studens Fr. Thomae, et multa de ejus sanctitate scripsit.）（註一）と云ふトッコ自身の言葉によつても想像することが出來る。然し此の句自身がまたトッコによつてトロメオの著述が讀まれたか否かを疑はしめる基ともなる。蓋し、トロメオはトーマスの生活を廣範圍にわたつて取扱ひ、彼の聖者性そのものに就ては僅かより書いてゐないからである。尤も彼の記述中のあるもの（例へば奇蹟）は、或る條件の下に於てトーマスの聖者たることを證明するに役立つ。故にトッコが「聖者性」なる言葉を非常に廣い意味に使つてゐたと考へられぬこともない。いづれにしても此の點明瞭を缺き、彼がトロメオの著述を讀んだことを積極的に證明する根據とはならない。

のみならずトロメオの著述とトッコの著述とは、例へば次の如き點に於て一致を缺いでゐる。即ちトロメオに從へば、レヂナルドが聖アグネスの傳達によつて病氣の平癒を祈つたとき、トーマスも病

氣であつた(註二)。ところがトロメオより此話を聞いたトッコによれば、トーマスは病氣ではなかつたやうになつてゐる(註三)。またトロメオがデ・アプルシオ修士（Fr. de Aprutio）の名を以て呼んでゐる人物(註四)を、トッコはパウルス・デ・アクイラ修士（Fr. Paulus de Aquila）と言つてゐる(註五)。其他にも微細なる點について兩者の間に喰ひ違を見る。これ等は、トッコがトロメオの話を、後日記憶をたどつてその「トーマス傳」中に追記したものでなからうか。少くもトッコが執筆に際し、トロメオの著述を參照しなかつたことは事實である。

（註一）Processus, n. 60.

（註二）Ptolomeus Lucensis, Historia Ecclesiastica, Lib. XXIII, Cap. X. タウリサーノが、ヴァティカーノの圖書館所藏のCodex中最も正確なバルベリーノのCodexによつて確め、更に疑はしい箇所を十五世紀筆寫のキィジのCodex及び十七世紀に一四三七年の手寫本より寫したものに當つて確立したテキストに依る（Taurisano, op. cit. p. 185)。

（註三）ibid ; Tocco, Vita (Prümmer) C. L. ; Pelster, op. cit. S. 388 f.

（註四）Ptolomeus, op. cit. Lib. XXIII, Cap IX (Taurisano, op. cit. p. 184.)

（註五）Tocco, Vita (Prümmer) C. LX.

三　エンドレス（Joseph A. Endres）はトッコがベルナール・グィドニスのトーマス傳を基礎として利用したことを主張した(註一)。然し古い時代よりの傳統的定說によれば、トッコがグィドニスを利用したのでなく、反つてグィドニスがトッコを利用したことになつてゐる。この定說はエンドレス以後

に於ても覆らなかつた。この問題は他日トッコ、グィドニス、及びカロの三傳記作家間に於ける Priorität 及び依存性を取扱ふ際に詳論したいと思ふ。

四 トッコがジェラール・ド・フラッシェの Vita Fratrum、及びトーマス・カンティプラターヌスの Bonum Universale（前掲記念論文集一六七―一六九頁參照）を利用したといふ假說に就ては未だ確證があがつてゐない。然しジャンスォンの言ふ如く、少くも前者はトッコによつて讀まれたものと思ふ。蓋し本書は、初期ドミニコ會のオフィッシァルな編年史とも言ふべきもので、ドミニコ會修道院には必ず備へつけられてゐたものと思はれるからである。殊にトッコの滯在してゐたナポリやアヴィニォンに於ては、容易に之を讀むことが出來た筈である（註二）。

以上述べたところにより、トッコの「聖トーマス・アクィナス傳」の源泉はほゞ明になつたことと信ずる。私は次にこの源泉と、別に述べたトッコ小傳等を基礎として、トッコの著述の傳記的價値評量を試みたいと思ふのである。然し紙幅の關係上遺憾ながら之を次の機會に讓ることとした。

（註一） Endres, Studien zur Biographie des hl. Thomas von Aquin, I. Art. Historisches Jahrbuch XXIX, 1908.

（註二） Janssens, Les premiers historiens de la vie de S. Thomas. Revue Neo-Scolastique, 1924, p. 406.